

塵点録

049
ア3
1




~~~~~古く又門人のするとし

○ 馭の長よりさすまね

西皇廟所より~~~~~の歌を御長より  
只待て~~~~~の書をおぼゆる~~~~~の書と~~~~~  
帝王の御勅定ある所書するに~~~~~  
~~~~~御口を~~~~~

○ 道春暗記本町之具服屋家御八十郎之譜

帳ラ

○ 中江とちの侍て~~~~~老母一人~~~~~

~~~~~文御~~~~~母と東國~~~~~スル~~~~~  
婦人の婢ヲ不越~~~~~古御~~~~~  
力のおも~~~~~大~~~~~主~~~~~  
不~~~~~  
~~~~~大~~~~~  
~~~~~  
~~~~~

~~~~~  
~~~~~

○ 徳久~~~~~此~~~~~
~~~~~  
~~~~~


はつと書きたるが、河判より歌と書の書を
なるといふる歌と書の書と書の書の書
終に陽の書の書の書の書の書の書の書
何の書の書の書の書の書の書の書

都て性の書の書の書の書の書の書
板の書

○ 当世中の書の書の書の書の書の書
と書の書の書の書の書の書

○ 信者信者 少の書の書の書の書の書の書

と書の書の書の書の書の書の書
と書の書の書の書の書の書の書
と書の書の書の書の書の書の書
と書の書の書の書の書の書の書

○ 石井石井 石井石井 石井石井

○ 海名海名 山名山名

○ 信者信者 七十七十 中村中村

高井三喜右 ち十三ノヤ 海軍中尉 六十七

少村三喜右 ち十三ノヤ 海軍中尉 六十七

○ 子に高野那の平子若田天皇の御孫

信長 信長 世二 信長

小河 信長 世九 信長

林 中尉 世九 信長

陽明ノ子ヲ慕ヒテガ陽明モアリ

朱子ノ子トシ

藤山 信長 世二 信長

三雲 信長 世二 一人哉有 世化の多ク

信長の長教を成す

信長 卯辰字文子 宇都玉由的

松下 信長 信長 中尉

毛利 信長 信長 卯辰字文子

信長 卯辰字文子 卯辰字文子

信長 卯辰字文子

信長 卯辰字文子 卯辰字文子

信長 卯辰字文子 卯辰字文子

喜もはなすなり近き比山虫のちもくう
乃山虫のちもくう近き比山虫のちもくう
取おして秘蔵ありと云々類々
さう惜せんわさう

○ 湖月おんく浪江入楚ノ指さく
未の未と云々浪江入楚ノ指さく
常力乃わつらう

お十八巻のて近き比山虫のちもくう

○ 吳孫日也傳ハ兄林古年なる事と云

集と云 市主原彦記 己未松原集

○ 比日事類云く八由光風と云人田書校蒙の解在巻
在

○ 京都のやむ七千二頃の中古の定り事なる所
林れ門七千二頃の中古の定り事なる所
中野 小舟 風月 林 上村 中野
武村 以十彩と十格と名なりと云

○京形よりその名の書梅々 神凡の山御流とく
或村市之傳

傳字の信長妻女より身梅九を奉 信長傳の
門才教事と傳之傳 卷の傳を門才 全尾七を傳

○大坂の書梅傳を奉と 本井加助門才を利田屋事
老士のその文とて 是れ一門才の才傳に十を奉

○都の傳 其年をとお海の皮う虎と消とて
元禄傳我の傳 大和は子 其年何の傳子
風流神代卷を他と

○西村の書梅の 都好色なり伝者

○雅皮の西伝九なり 都色五巻を 四本を傳に

寛文傳の如大石丹市を傳に

○鳴文柳 大坂傳りりわの傳者

○通燈個目 西村あり 全平 道し 西直

道春の傳にりり 茲にむり 志願を年記にるの八巻
あり 京伝元禄十五 五年 二月 閑板

○謙信亭録三年庚寅に生れ 幼名猿松 長尾為景
二男ナリ
○大石家日記より 訓園集 武名傳の史記

聖徳太子の御縁御記 為徳ノ御事 孝武天皇
書 正成系御抄 義久西家七書ヲ論ニ名
知布抄 系和系の探淵抄 武徳御事 七書
御勅の巻書ニトク

○ 首実徳とぬ名ニ 頸對面^上 頸見知^下トク
大將多天ノキ水太布ノキ拭トク

○ 謙信 二十ニニテ剃髪ス天下平均ノ大願ヲ毘
沙門天ニ祈リ久レ莫不成ハ速ッ命ヲ斷トク是ヨ
リ肉色ヲ禁ス況ヤ女色ニライテラヤ色欲ハ若年

ヨリ祀ス^{ナシトク}

○ 上杉ノ家臣武内家稱ノ苗裔^{ウサギ}宇佐^{ササ}道^{ミチ}向^{ムカ}ノ御事
ヲ以テ謙信字法ノ師トス

○ 北条成房の巻目松田尾海も法方のもち巻りて
清原の巻もて湯浴して法施の巻もて湯浴せん
示るの清信も指く愁とく小田あるは世傳
澄々清りり様おせとく或は湯物傳く云わぬ
半古傳益多ノ牛馬の糞紙炭火の中に入
時を指^{トク}傳とく果してその約の

生きたる人殺さん形と掩い毎夜せし人と其の
悩下しきし村傍におもむる亡魂と云

徳信出生る迄にあり御信家丸に及ぶ二十二巻
あり年実歳跡ありてきして道あると云

此やよき徳信と云

○ 伯耆守家丸 十巻あり 他者ある

○ 河内守家丸 十巻あり 他者ある
天守ヲ造るにあり
此の東西十七百三十二万と云

○ 足利家信 天正元年七月信長に攻められし事あり

笠ヲ出に降参と云

○ 信長より大坂の御殿に
此致しと云
城の一角を其のつらと云
信長肺
肝と御殿に攻られし事あり
して御殿ありし

○ 源義経 橋にありし

○ 舟上 周武ノ向 漢楚ノ向トモ

○ 信忠乃の舟 清以 徳田 舟乃と云ふは 命ノ

惜りしん 舟上 一をア 石井の舟 一を石上 一玉斗

下 禮名の舟 一をア 舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

○ 秀谷九才の舟 信忠乃の舟 二条乃 舟乃と云ふ

四王天 但馬守 政教乃 舟乃と云ふは 命ノ

○ 明多志乃 舟乃と云ふは 命ノ

一 舟乃と云ふは 命ノ

水上げ乃の舟 舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

アラモツタイナントテ 舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

舟乃と云ふは 命ノ

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

行祐

尾上の銘をくたしれり
光秀

此懐命今に傳へて彼山に感徳此にアリト云

百韻の光秀より十六あり名残のむ所心前々句
「あも香と致とさくひるもの下と致りる軍白紙
「あくは長閑あり時と光秀詠して懐命よを
いふ事いひて思ふ十を懐命光秀と云ふ事あり

懐命自殺の所を遠れ城を少幡同懐命は
金と更す付死

天正十年の春武田信玄の旗本なる紀ある哉

冒と云者信長少僧参り—自分の他人ハ不及中家
未乃よ村平春の山村を懐命井也春の田原中
兵衛春の懐命あやう人懐命何止も改年とて指
上りり

織田七兵衛春信長ノ甥ニ光秀カ聲ナリト云
懐命尼ヶ崎ニ住ス

織田之七信孝母お春身り、福教りる、くを尼ヶ崎の
兵衛水加を懐命於深堂門出先とて皆く都に
より光秀より年少を加りりり

信長を中山金剛峯とて和泉河内ノ士平ニ命

殺サセラレタルニ山僧信長ヲ呪咀シ六月二日一七日
充ケル此日光秀カ逢^ア逢^アトク

○ 信長天正十年正月二日夜ノ夢ニ見ユテ馬ノ腹ヲ
喰破リシカハ其馬忽死ニケルトコトテ後覺ル信長

所^レ手^ニテ^シテ^リ

因^テシテ以爲^リ予九十九ニテ馬ノ歳ナリ子ノ年ノ者
怨敵トナルヘキ先表ニモヤトテ諸公ノ大名并家来

大身ナレ輩ノ年氏ヲ算サセラレシニ日向守計リ
子ノ年ニテ為^ル年方中世年ニテ有ケル信長固玉ヒ

光秀ハカハル^ルトスヘシ氏不覺也扱ハ虚夢ナリト

申サレシカ終ニ光秀カ為ニ命ヲ捨ラレケル

○ 光秀カ妻ノ弟妻亦斗^リ斗^リ以^テ範賢^ハ長演^ノ御主^ト

シテ一千金騎ヲ随ヘシカ恒^レ印^ノ依^テ心元^ナリ思ヒ

斗^リ斗^リ川具^シ小舟^ニ西条^ノ湖^ノ水邊^ニ漕^出ケ

ル処ニ俄ニ悪風吹来テ舟悉打カヘシ一人モ残ラス

失ニケリ ^ノ以上明名軍記

○ 上有可耕田 下有長流川 一月又一月

西月共半邊

用ノ字ノ謎語也 一山又一山 三山倒懸 是モ用ノ
字ノ隠語

三教指歸 七卷 空海作

免角主 外甥暹弟子 龜毛客 儒

虛亡士道 假名兒 佛

○ 晉書云阮籍字嗣宗性至孝母終年人因慕

對者求止籍留與決賭訖既而飲酒二

升舉聲一號吐血數升

○ 南齊書曰張融善草書常自美其能帝

云卿書殊有骨力但无二王法答云非

恨臣无二王法所恨二王无臣法

○ 抱朴子曰入名山宜知六甲秘呪曰

臨兵闔戰者皆陳列前无行凡九字

常密呪之无所不避

○ 史記云其羅曰大項彙生七歲為孔子

師 項彙短命

○ 心地觀經云或在菩薩下云云如七步蛇

若害人時毒力熾盛出過七步使命

終一蛇毒力尚能損人何況五蛇共為

傷害以之喻五欲也

○ 孟子云莊周楚人也為人下大賢也

○ 譬喻經云晉有國王殺父自立有阿羅

漢訖其餘命不過七日云阿羅漢尋往

化之ト云ク稱南无佛七日莫絕命終魂

神趣向阿毘地獄大聲稱南无佛地獄

罪人聞稱悉佛皆只一切稱南无佛地

獄猶火即時化滅一切罪人皆得解脫

○ 夢瀧セ、ナキカハマ

○ 涅槃經三十、衆首撫象各于觸ル、外ヲ以テ

象ヲ形容スル言アリ大意偏見象ノ全体ヲ不
見ニテ說也然レモ亦不說ニアラス此ヲ離レテ更ニ
別ノ象ナシ

○ 涅槃經三十云一切衆生有有四生有胎

濕有化有二嬰兒即受生相三童子即

受欲相四苦行五成道六降魔七轉法

輪八入涅槃

○ 高宗諱陰 三以上三教指歸

○ 中山集 卅卷 日政宗元政自号妙子或号不

可思談又号泰堂姓菅原氏石井 宛文

八戊申年二月十八日死 四十六歳 始井伊掃部扈

姓也元政母ノ妹ハ掃部次ノ母ト云

高彦先曰脩學須自出於本心不待父

母督責

復鶴飼石齋書ニ用之則行舎之則蔵

此二語兼以惟我ニ有是乎吾是以

昂疑其古語不特韻之叶而已

同書有身則有事如影之随形山海空

市无逃去処欲逃之者所謂畏影而走

乎日中也无若无心於事无事於心

自疑云元政甚羨質也召仕ノ若黨察慕

是思ひ信子耻ヲ捨テ不止也元政此取掃部

扈從ニ不羨カク不便カク不得止刻若黨

ヲ手付ヌ是ニ世ノ無常ヲ親シ物爲ラいといふ

堂精進ナドヲシ心ニ是ヲ不惑ニ二年ニ出

家思ひ切リナリ川流平島ノ母也元政妹也

法皇也台躰大師有之ハ福乃御所ニテ大師

乃形也、少福と大徳と刻之合之ト云

挾侍 即招侍也出法苑

紫式部記云每謂如何藉班馬之筆譯此書而傳之異朝也此特少幸之偏好耳今則此心亦亡矣

小高顯 塔梁ナリ

神農 某能活人某能投入自從牛首始嘗州添得一般生死ヲ新

故二曰妻也 出僧祇律

櫻易熊野田日孟法師行狀云其俗時

若別有馬利耶獲者弘所謂天主教

ト云々及説半也法師前日汝説天則

清淨人則不淨捨不淨人作清淨天

ト云々麥種作麥菽種作菽以之推之

豈得不淨人作清淨天耶下畧耶獲

罔措即夜潛亡去

維摩有女名月上

遊御番宮 探春林樹中行至御番宮

白石斲萃表黃茅餘古風
鶯啼談法
鳩喚唱空々未掩和光影
夕陽処
々紅

○ 庚幾以面晤之日直稟郢教
必勿倣磨
兜堅幸々

○ 六一集讀書詩 至哉天下樂
終日在
几案

○ 日本俗終法萃全部日必煮赤豆粥祝
之名曰智甚粥

○ 題八景 煙水茫々映夕暉
雁鳴寒雨
雪霏々昏鐘迎日市人散
風送元帆
歸不歸

○ 避俗一坐長養病何由從
羨薄拘羅
語類云讀書閑暇且靜坐
因奉陳烈先生苦無記性
遂閉門靜坐百餘日却讀
書一覽無遺

○ 五辛辨興滌 一說アサツキ
或云萃夏不產
故不翻也或曰一一即阿魏也
戎蔬

註曰慈愍三藏傳云五辛此土但四
卷一者于真國有之其根白葉如
蔓菁臭如蒜又曰一梵音訛轉正
應云形具云云

書法華經後世所傳者略法華經云
一帙八軸四七品六万九千三八四
余按羅什記妙法華成七卷或八卷
而世多用七卷者至唐慧明因天人
請又成八卷一云云白樂天石壁經碑

云妙法蓮華經凡六万九千五百五
言宋景濂法華叙贊云凡六万九千
七百二十四言

○ 蟬松偃且必應求耳

○ 蒙潤集註并云 四教儀有集解蒙潤
何蘄集註一云云玉崗新註因此作矣其
所援引的指其卷某紙意一從義散謾
而為啓蒙之助也先是台家諸說設明
某卷无指其紙者玉崗詳之意在茲乎

○ 歲丁未季春十一日在雞山夜話時忽地動有輿而吟

閑林底事忽翰一室搖如泛船六種震驚疑覆地片心清靜覺冲天山鳴谷應雉相叫兩絕夜深人未眠群動息時閑戶見月明惟在

○ 父母恩重經 父母懷抱和々弄声

○ 偶有示儒叙餘論者讀了有感于懷而作

癡人排釋独空苦昧者斥儒徒自覺縱取大千傾倒去何曾於佛損纖毫

○ 七面山者在身延峰之西春氣川之上乃吉祥天之迹大明神示現之靈區也山因鬼門而因七面故名焉

以上中山集

○ 漢語大和故事 五卷アリ

○ ホレルトハ ヲホレルト云畧也

○ 実ノナキヲ馮虚ククト

○ 人ソバへ人映ナリ 枕草子 人バハスルモノトアリ

○ 源氏竹川ノ巻、哀トテキヲ免セカシ生死ノ

君ニカスル我身トナラハ 此碁ニヨセシ哥也

又碁ニカタミ先ト云コトアリ 互先トカクベシ

○ 穀ニ不立ト云ハ 畧量ナクテ知行ヲモ取ルコトアタハ

サルモノナリ

○ 唐傳奕曰懲沸羹者、吹冷齊傷弓之鳥

驚曲木

○ 荷負 左傳曰古人有言曰其父析薪其

子弗克負荷

此語ヨリ親ノアト師匠ノアトヲ傳フルヲ負

荷トハ云也 諺ニ代々續キ来ル家ヲ荷負

人荷負ノ家ナト云

○ 村上天皇六十ノ文字ヲ作り玉フ其中ニ畠

ノ字随一也

○ 始モナク不圖出來タルコトヲ權輿モナシト云

○ 權柄者 押柄者

○ 寛永年中武名江戸ニ駿馬アリ耳ノ下ニ角ヲ

生ス長二寸余アリ阿部對馬守重次此馬角

組興カして信長に歎ス後信長のためより父の如
く長兄に死す所を其の母と信長に送り其妻
は甲斐守と云ふ御所御所の御妻と云ふ自給
市の子と送り一女秀吉の妻と云ふ信長は之を
右衛門殿の妻と云ふ大敵虎殿の母と云ふ一女
若狭の如く云ふ云々

御中侍様と云ふ子孫を命を負ふ所は御所
よりと云ふ大音之御所より云々と云ふ火災
失せり山の中誠亮の如くは信長を以て平人

討に

江前仍も定ね大に云と困るる地以心
御所より定ねと打んと云亮及臣今井肥
前も御所より云々定ね返る忠に信長
御所改心。而國公信長臣井田強由彌々亮
此々云々似き故。信長申言と若智定ね
此に御所を助くる御所を檢使に語切信長
信長辛して命と仰り御所を御所と云ふ
定ね御所と云ふ大と云々御所を御所と

るくく又まゆれしとて今井父子二人切腹す

○ 二葉の政善治の所信長の臣佐よりなる尉當
修理亮忠孝の所忠孝の臣佐よりなる尉當
吉田守中村紀隆各三人先より此處御座候
とはせしゆらるる田村忠孝お神お川小
あうあ方えんり付者之旨おしとてお守御船
より扱へん双方和睦す

○ 丸毛兵庫

○ 長久 江州ノ所ノ名

○ 信長浅井ト和睦ヲ目出がトカケハ位を越く
申符^{申符}の^{申符}世^世の^の世^世信^信え^えら^ら中^中ケ^ケル^ルハ^ハあ^あの^のま^まの^のい^い
申待ノ衆の衆ことのみお守りたまへ

○ 信長浅井ヲ討ニ為ニ虎御前の人殺と書ふ
小谷とて教味方の若者九田川中とありお守りりる其
信長方の若者九田川中とありお守りりる其
あま 浅井と敵らいたる御やおの若者の子
野木の子とていひお守りりる浅井と若者なり
此の事か 浅井の敵と若者の子あり赤松^{赤松}幸

のまことしき業のまじりし次の如き信長を
くまりの号に信長を橋の下の土亀ひらりと
せしめしむるといふ川もつる出き首級
とんと懸念を

○ 信長将軍深きらんをゆき重宝目下乃尚以
こゝに在貴と名ありしや在土とて三年
正月乃礼いあら大名と登のこ者よとの
ケル
以上浅井と代記

○ 集義和書十六卷 徳次郎八代之朱子と

王陽明の如く、王陽明の論より心と身を
とるに書中 当代ヲ不痺云律多く有る

○ 亦韜に記す所の文武大なる論を皆する所

○ 唐とて百年の百年はつゝとるに文藝の業
おもふ所の如き論も不常同俗なりとて
主徳の如く、王陽明の徳を以て名を
ありしに

○ 儒者と一人の徳者の名に

○ 是の如く、王陽明の徳とて上より我秋の徳と

可なりと云ふ

○ 俗に云ふ世界の福は神に在り世の中の人何れ富
ゆへ天地に徳を多しむ神の福を蒙るは神に在り
富貴は天に在り

○ 日神の御徳は人々を田園多し山は是れ徳に在り
人々を徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
わたりて民を導くは神の徳に在り山は是れ徳に在り
之を導くは神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り

幸あり

○ 世の中は是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
不仁は是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
神は是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り
是れ神の徳に在り山は是れ徳に在り山は是れ徳に在り

○ 日南北向の陸と王をみるんぞのし音あゆむと思
めとぞしてあしる王化のゆる感とるほきり
○ おもひの愛を思ふはしめてちんちん當時のまじり
すめとよまはれ多かり

○ 太田道隆を仲山出くさるあしんぬる民あま
まきり笠とらりあま夫に仲山出くさるのし有山
吹の夜とつらきあまてあまきり笠を思ふとて
入るる道隆あまを意地のあまらりあまきり笠
けりあまらり京ノ客あまらりあまきり笠人な儀女

車にちきよおやうんまを思ふあまらりあまきり笠
七重八重の花は咲きし山吹のらのひはあまらりあまきり笠
あまきり笠 是も道隆恥しむるあまらりあまきり笠

○ 思ふまじりあまらりあまきり笠あまらりあまきり笠
あまきり笠あまらりあまきり笠あまらりあまきり笠
あまきり笠あまらりあまきり笠あまらりあまきり笠

○ 物あまらりあまらりあまらりあまらりあまらりあまらり
あまらりあまらりあまらりあまらりあまらりあまらり
あまらりあまらりあまらりあまらりあまらりあまらり
あまらりあまらりあまらりあまらりあまらりあまらり

就と呪して由と形との形仍め事とまふ
○ 常非敵との傍投すの事川水とたあらふて
しき心も他ノ信すりて元是事と云ふ
幻術と水の形と水の出らるる人の同じん事
事々ある事の由はつゝ人の水の深淺車
水と流るる事と形との事なり

○ 予天下の事ゆふ理成る人よと云ふは修方の
わらうといふ事と文と事との世に事なる事
と事成る事と事なる事との事なる事なる事

天下の理に於て難い事一儒公に天下の
事なる事なりといふ事なり一而事なる事
わらうといふ事と事なる事なる事なる事
○ 之物の大なる事なる事なる事なる事なる事
十層の人の事なる事なる事なる事なる事
事なる事

○ 天下の事大早^ニ法と法と法と法との事なる事
事なる事なる事なる事なる事なる事なる事
乃て事なる事なる事なる事なる事なる事

ぬれよのくつろけしきる内水の声とあすも
火のうたあふよあましく水糸けまるとは難
整傍洞のきる海ほと双洞あつて奉せよ双
洞の美の洞の本まのまに水々火の母の水の
水火を廻すれよ本のぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
會と火のまのつとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
原井の神あふん業と奉せよと作せらる果て
大なる海とら

○ 丹永為季氏富スルノ海鑿金せり 白堯按

○ 唐虞揖讓三盃酒 湯武征誅一局碁

○ 顔子三月仁よきらん 四所答三月小くくん

とら故三月と云々年中のとし年中をくらされ
そふとぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
字あつて意ぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
まらぬとせぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
いととととと

以上集義和歌

○ 五集記 一冊アリ在堂和歌 後巻は美奈宮傳

あつての二三行

○ 西宮の山に西宮の山に西宮の山に西宮の山に

佐伯の山に佐伯の山に佐伯の山に佐伯の山に

○ 長田の山に長田の山に長田の山に長田の山に

各名所の山

那古の山に那古の山に那古の山に那古の山に

大和の山に大和の山に大和の山に大和の山に

と成の山にと成の山にと成の山にと成の山に

氏里の山に氏里の山に氏里の山に氏里の山に

人の上に住人は男婦の山に人の上に住人は男婦の山に

夫の山に住人は男婦の山に夫の山に住人は男婦の山に

恋慕の山に住人は男婦の山に恋慕の山に住人は男婦の山に

之の山に住人は男婦の山に之の山に住人は男婦の山に

かぶの山に住人は男婦の山にかぶの山に住人は男婦の山に

山の上に住人は男婦の山に山の上に住人は男婦の山に

英化の山に住人は男婦の山に英化の山に住人は男婦の山に

有くの山に住人は男婦の山に有くの山に住人は男婦の山に

くお山の山に住人は男婦の山にくお山の山に住人は男婦の山に

此化をうけりし事行々あり^{上三三}とありし事
之を或地の者くん却て之をうけりし事対自害は
のうけりし事あり^一か別々^一なる事あり^一なり
ありし事あり^一なり^一

○尾宿の尾宿定正武也切敷一貫 所持見^一なり

一 家康云之別系余の族也其の族は^一なり^一の族は^一なり^一
半平定正城なり^一なり^一池を有せり^一なり^一池は^一なり^一
千内十三年

一 池川の池田氏云^一なり^一池攻切の戦^一なり^一池は^一なり^一
池今も尾宿定正の首領あり^一なり^一池は^一なり^一
池は^一なり^一

一 池の池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一
池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一

一 池の池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一
池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一

一 池の池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一
池は^一なり^一池は^一なり^一池は^一なり^一

御尾海老よりと名乗るまゝにたてしめし尾海
老平と名乗る川中にも一人出たれど金也殿の
一紙取付方アしりしと申すよと能く抱懐り
細く大いり入海老のヲねく押して首ヲ取付方
の取付ヲサナヘテ抱もよめぬと皆同く
答にけ首と名乗る御出立候御尾海老の御
と申すも此者有るやと討りて若くとも此上
人の御持候一山屋の御持

一物申すは歌の業も来ルテ尾海老を遊戯一人

突候首討れに如し印も是候と申すに
来り其首取にゆさせヨ 山屋の御持
當りがる名仕テ首と稱奏者ありし 御出立
候出立先て取れと申す有持候のいしと首取
物申す今ノ御出立候御持申すと能く
又御持申すとも取れと稱奏者ありしと
名するも是乃首と稱奏者ありし 山屋の御
持出立先と申す 御持申す御持申す
御持申す御持申す御持申す御持申す

物考く生みの非なる尾流も年々少く其の討
 首領而もは是れ古之統のそのうち
 家康公の作はきとてはまはれありふまの重
 き名うらひも物とてありと四六を以てサス
 才なるありと御機嫌をうたへま年先して亦
 する名の限り故なるかまのまると思感
 一 松田新公卿と云者成も年討はれは是に信なる
 場取ぬを

取めても年一斤たぬ向井信長と云ふはあちり
 打して向井と切伏首領也
 一 家康公の強は御兵をうたへ悉放火山佐ヲ討捨
 へし勝ぬもも年多く人ヲ切
 一 信長とて松平同治も本川ヲ越し迫合候也して
 信利ヲ討し是れ是れ初孫尾流も年一して
 首領而もは是れ
 一 之物考くは是れ一討田御は告武者は誰か
 討意もも年島より海ヲおもくは実川

是の事も討つての中者共の首は出さぬやう

一 小田原篠久は松平國房并侍を討つた。作付
郡村に於ては同族の殿との縁故は年々あつて
篠久は父内入城の事一を立上りつゝは篠久の
情を憐れ味方と成るべくして殿の縁故多
く申すに流家國房と成る中申すに同族は年
ホウビに申す

一 家康は山上原松平國房を討つた。作付郡村
に於ては同族の殿との縁故は年々あつて
篠久は父内入城の事一を立上りつゝは篠久の
情を憐れ味方と成るべくして殿の縁故多
く申すに流家國房と成る中申すに同族は年
ホウビに申す

是の事も討つての中者共の首は出さぬやう
一 小田原篠久は松平國房并侍を討つた。作付
郡村に於ては同族の殿との縁故は年々あつて
篠久は父内入城の事一を立上りつゝは篠久の
情を憐れ味方と成るべくして殿の縁故多
く申すに流家國房と成る中申すに同族は年
ホウビに申す

カニ嶋
後、善光
者、往く
第、茶
枕、袋
等、三有
之、今、六
名、渡

一 義正とて、美分武取の山神に、
義正とて、うら、稻子十取の山神に、
乃、後、の、所、の、あ、れ、の、

一 同、是、の、陣、の、内、内、花、助、の、終、の、志、能、と、ト、ラ、一、並、の、
馬、平、の、終、ハ、少、小、二、三、キ、名、中、の、一、一、海、原、十、一、
の、終、指、其、口、後、多、り、り、の、

一 程、現、極、少、海、原、名、古、也、海、原、又、の、三、善、の、所、の、定、
心、の、百、出、の、終、一、也、上、善、と、も、一、カ、ニ、嶋、
の、後、の、海、原、終、一、也、川、の、終、一、也、也、

一 上、善、と、の、終、の、一、也、送、り、出、の、海、原、終、一、也、
法、分、其、の、上、極、義、正、と、ト、ラ、一、也、

一 御、善、と、の、定、心、義、と、ア、終、ナ、レ、或、と、名、ハ、如、在、不、
一 乃、後、の、所、の、あ、れ、の、

一 一、乃、後、名、古、心、法、終、一、也、
義、助、の、一、也、の、柳、下、也、也、
切、込、中、の、一、也、内、花、助、也、
立、向、切、込、内、花、助、也、

然るにカイナニありては、有申のなる討敵中、
義重の長子に、討敵馬に、
之の善い、底のまらゆる、
のた、大坂の陣以後、
は、神のまらゆる、
之を、
御目、
格現、
社云、

社云、
元和七年、

助六、
駈、
門、
一、

太閤記二十二卷 元和二年三月上旬

小瀬甫菴乃喜撰

道、
の、

八雲より出るをよりにて指針二見の浦より
志つとして之体より神とせりゆりれ春社と
ちん送るじりせとま

○ 井ノ口 後、改年と号ス

○ 野里湯物 播州の産あり

○ 任中も冠城トまけけ一城とわし〜彼意して人と
里〜の〜万牛五丁の攻ヲナシ終〜攻候と
ま〜

○ カキニキ
平教沈不集

○ 今の世武名とまけけ〜ゆ〜は〜とあり〜るま〜の
徳と〜を〜思〜ふ〜山豆板の七印徳宗田又長爾
境の〜の徳あり

○ 紫田徳宗家自紋の何節死する者多し又死候
造り者も多し文者徳宗志士と云ふ人とは徳武
者と世俗のには詠載〜と徳巻は利家の人受
とぬすも出ま便りとはらけゆり〜と又金厨
義理と遠〜と若〜とさつ〜ぬ〜る〜あ〜あ〜あ
〜使〜り〜は〜候〜下〜あ〜ん〜ん〜と〜

地下人といふは此の者よりして法人の古伝の里
果しなり

○秀忠公尾別と長下との争ひありしは、
地との争ひなり。是は淨福の争ひなり。其の争ひは、
申す所なり。其の争ひは、此の地は、何れに別か
と争ひ、んを檢地の者一郡に別つて出さしめて
一徳の内信存れん又、争ひの争ひは、換言の争ひ
若し此の争ひをせしむれば、撫入禁して控成しと
不及して争ひの争ひは、制さるん

見

- 一 隣々地、依如先親て然る年
- 一 百姓の改姓感なり、と云ふ事
- 一 新に不自指する事
- 一 治人の能なり、はるるはあふてな事
- 一 昔の因習、いふ事、いふ事、いふ事、いふ事、
入らる事

右記の事、いふ事、いふ事

天正十七年、月初旬、先師の川、檢地と云ふ事

夫も尾別念ふ事とらゆり又亦るを減す云
之別川別念ふ事知事知事とて或る名減すと云
尾州并別之州に信智の目出ていふ事減す
之後御事とらゆり云々

○ 七久手ノ役の丹場尾代御事と云ふ事
御事と云ふ事とけ心静との事云々

○ 細川御事と云ふ事 今茲天正十有二月に
初博徳殿に九州を治す事と云ふ御事
先づとらゆり云々

○ 日吉御事と云ふ事 今茲天正十有二月に
之ハ信智の御事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

○ 尾州御事と云ふ事 今茲天正十有二月に
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事
御事と云ふ事と云ふ事と云ふ事

肩を金禰の如く思ふと心は空しく
利欲の心はあつた境界なるもの
にも是れぬと云ふ人つたは
先づりしとて殊に其の教平に
思ふ

果敢と行と論

信長は我々の如く信長は
自強を志すは外に
自強を志すは外に

和因は信長と流川久柳
自強を志すは外に

坂井右近持は其の如く
本山大徳小徳は信長
自強を志すは外に

雲列依陀江の水は浪子二十章に於て

風流帯刀先生は信長
くさるゝる二十章の運上
同心せん

竹中半兵衛十九章の
早の如く是れは
對して

信もなれし勢を死海をらんと切敷し改年の時
未補と那也

○ 山守甚次郎 後改藤 舟 舟 尼子伊予守久人

長小して雲列富田の底生藤舟の列頭なるは秋野藤舟を藤子

いゆあし 毛利右馬次元就臣よ川半平と云共藤

根誤 久人討らんして小川様舟と改名し

藤舟討尼子義久終元船津守山中

上より行一ふい出ると徳せんものと新をそく天正

七年四月十日先軍を那乳入し氏臣のとす藤舟

而く百姓を出向し是に自契を以てめらんと徳と

持者と持ケルかの事と内をなす事といふ

徳之尼子の或は徳舟と云ふ 山守甚次郎と云ふ

武勝を先徳と起しりるは徳舟なり云々

徳舟久の母の徳舟の判官を徳舟と云ふ

其徳舟と山中大徳と云ふ百人船武勝と云

追徳舟村判官を徳舟と云ふ徳舟の首九を介八

面平五郎と徳舟と云ふ徳舟の進上下云々

○ 拓大徳舟 元徳舟大徳舟

番の是等の事。道に逢ふ事多し。遷すまじく大はの
宮と造りし。之上嶽 幕の巻を神位の上の
の并と申す。才四十四代元正天皇の御宇。善光年中。
天降り。日知才二の忌火ト云々。 四十五
瀬人法師の口説云々。家世八入。乃後のせりせり
時より。妹の妻。元門院。親く。く。く。く。儲子と云々
倉院の事。亦。延天。ト云々。

此書。平家物語。大目少昊之。法住。与。火。之。継信
節。死。か。と。云。て。云。ん。今。之。又。景。信。兄。に。の。や。鞠。ヲ。丸。ル

半。なり。但。屋。給。合。致。し。現。中。次。を。多。事。を。願。也。子
少。を。多。事。と。色。ヲ。換。て。ハ。少。極。終。大。宗。行。甲。の。欣
返。こ。よ。打。包。て。日。宗。行。舞。ノ。前。舞。ハ。有。な。テ。ゆ。ハ。花。下
且。と。船。入。頭。と。延。く。曳。く。と。を。し。考。う。り。終。り。所
竹。の。板。フ。ワ。リ。切。所。ヲ。扱。り。く。以。少。わ。り。と。云。々。

玉。虫。の。巻。也。立。く。ま。一。射。ま。さ。る。の。同。一。 四十二
伽。那。久。羅。羅。ス。ワ。ウ。螺。ノ。下。か。か。れ。く。大。木。ヲ。碎。ク
同。ヲ。起。ス。梅。檀。ハ。二。葉。を。れ。も。四。十。里。ノ。伊。豆。蘭。ヲ。消。
と。云。々。 四十一

競^{キョウ}ノ流^{リウ}口^コと云^{イハ}者^{モノ}ら^ニ矢^ヤ死^シてハ^ハ華^カノ敵^{テキ}取^リク^ク王^{オウ}御^ミ牙^ガ
一^{ヒト}乃^ノ矢^ヤ男^ヲこ^トと^ト者^{モノ}取^リぬ^ル家^カ取^リぬ^ル 〽七

○ 弘^ニノ^ハセ^カイ^ヨリ^馬ノ^頭ヲ^破ヘ^川向^テと^キ 〽廿八

○ 護^ニ田^ス鳥^ハ毛^{トリ}ノ^矢負^{ノケ} 〽廿七

○ 比^ハ叡^カ山^シハ^長ケ^レハ^長柄^カ山^シ 〽廿六

○ 幸^カ明^カ思^ケル^ハ我^ガ身^ミ当^タ時^{トキ}食^クノ^宣旨^シと^蒙ヒ^リト^テ

同心ス 〽三十

○ 上^ス伏^シニ^タル^敵ノ^人ヲ^召ク^上日^ノ者^ヤム^トキ^ク 〽廿五

○ 胡^コ任^ニ索^トハ^河ヲ^吞樂^ム之^ハ河^ニも^浦六^鯉ヲ^切ル^舞也

〽廿四

○ 于^シ余^ノ院^ニ也^元年^七月^廿八^日崩^ス也^其夏^郭云

京^ノ中^充満^スニ^抑ノ^郭云^空ニ^テ喰^オハ^ル也

為^ル也^其入^室主^人將^云ト^云不^祥之^と也^其

郭^云ヲ^抑ヘ^テ獄^舎ニ^禁ラ^レク^{ナリ}○白^川院^以時

金^泥ノ^一切^經ヲ^以書^字法^性ヲ^以テ^御信^養ト

古^事後^一出^二 弘^定之^も多^くなり^ニ交^是門^ハ才^四友^ハ倍^年

アリ^又大^雨ハ^河之^逆鱗^{アリ}雨^ノ器^ハ入^テ獄

舎^ニハ^入ク^{ナリ}

○ 我邦 始テ仏法ヲ信スル者ハ蘓我馬子也中
華始テ信スル者ハ楚王英也楚王英ハ後漢ノ
明帝ノ弟ニシテ叛ク一ヲ謀ル賊子也馬子ハ君
ヲ弑スルノ乱臣也シカレハ則仏教ノ世道ニ益
ナクシテ人倫ニ害アル一亦知ヌベシ

○ 物部尾輿中臣連鎌子同シク奏シテ浮屠ヲ
廢ス欽明天皇則省司ニ命ニテ佛像ヲ以難波
ノ堀江ニ流シ捨

今ノ攝州大坂ノ夏ニアラス大和国高市郡其所アリ

○ 今ノ世ノ柔術武備志ニ是ヲ拳ト云古ハ是ヲ
手搏ト云日本ニ始ル一ハ近世陳元贊ト云モノ
我國ニ來リ居テ江戸淺府ノ国正寺ニ寓ス又
浪人ニ福野七郎左衛門碓貝次郎九三門三浦五次
右門ト云者三人同シク彼寺ニ寓居シテ衆寮
ニアリシガ元贊カタリテ大明ニ人ヲ捕フル術有
吾具術ヲ知ラストイヘ氏能其技ヲコツルト云
右三人ノ士具術ヲ聞自ラ其技ヲ工夫シ出シテ後
能其変ニ熟セリ是柔術ノ起リ也凡調息ヲ要

トス 拳法秘書

○ 薩戒記 中山定親作 應永辛申ノヲ記セリ

○ 日件録 相國寺壽星院ノ瑞溪作 卷ノ六じう一為

としのあふ年家の信十式巻と他^下留て播^下りな
あつて後性信と云とのきとをある上セテ新編スと
あり是誓志年家の信十式巻と他^下留て播^下りな
後^下の信家の信十式巻と他^下留て播^下りな
作^下りて生信と云りの首月と云りて作^下りて生
信と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生

けはてしなくまじりあは

○ 今^下の世の信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生
是と云り

○ か^下の世の信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生
せんともて其^下の信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生
しるは是^下の信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生
若^下し十九のふりてし^下の信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生
翰^下書^下大^下全^下命^下ふ^下て^下の^下日^下毎^下の^下衆^下人^下あり^下日^下中^下
下^下の^下信^下と云りの首月と云りの首月と云りて作^下りて生 二月癸卯

けりちて天のよのそくもあつていふことなり。其
後傳之の系法よりて年志といふ事と好まら
新編後傳おもしろの一切種と檢閲してついでに
けりしもの年志結紀のよからいふ事なり。其
後傳傳法よりて別とていふことなり。

- 持統天皇七年十二月陣法傳せむとて法を
あつたなり。いふ果紀をきく事謂ふ法也。
結肌帶むすび といふことなり。いふ法をいふ事なり。其の
医者の中よりいふ事なり。美事裏方便の才六

巻げ事やうり物とて人毎にする事あり。其の
さうといふ事なり。

- 今ハ世界の中心日本の海なる事なり。いふ事なり。
- 文布ぶんぷ 青筋ノ文アリ布ヨリ。
- 太平記のあき色 伝言合録の系下。楠公つらゆの兵士
の口。天智了親と言法師故志病の事なり。又斗たうの
足く事なり。海と馬ノ平頸へいけいより別とていふ事なり。其の
事あり。いふ事なり。其の事あり。いふ事なり。
- 神功皇后の四十六年。百濟首長とて國を失ふ事なり。

本邦の元へ入つてうき世にあらん所あり

中興の志ありしに、その初は、その志ありしに、唯、

のこ大らと、その初は、その志ありしに、唯、
と、合せしむる事

○ 後九十六文と、その初は、その志ありしに、唯、

長尾意を、制と、その初は、その志ありしに、唯、

○ 甲別原の志ありしに、その初は、その志ありしに、唯、
甲別原の志ありしに、その初は、その志ありしに、唯、
天正二年、武田信玄、其の志ありしに、唯、

九、その初は、その志ありしに、唯、

その初は、その志ありしに、唯、

定られ、その初は、その志ありしに、唯、

其の志ありしに、唯、

その初は、その志ありしに、唯、

其の志ありしに、唯、

其の志ありしに、唯、

其の志ありしに、唯、

其の志ありしに、唯、

甲別の上段入付信を記し置けり作られたる
伝言の事なる間甲別虎と建之して人の解を
るに厚うなり。此の甲別虎字體十九冊同末と
信果亦就虎豹の事なり

曆紀行よりきこふテ和年記 七巻あり

● 聖 ^{ゼウ} 此の急之訓あり凡の字を聖ともし凡の
死當の元極とせざるの事ありぬも此と
しめり聖もはすくも此つぎてもとぬすく

● 細 ^{イシ} 細石とらむといふはけいごうの出

● 家 ^{イシ} 此の指之急なりといふこと云々なり今名と
此は日名といふことと此を指すは此の指す

● 瀑布 ^{ホシ} 瀑布と云ふは智の事なり其の事なり其の事なり
此の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

● 此の事なり其の事なり其の事なり其の事なり
此の事なり其の事なり其の事なり其の事なり
此の事なり其の事なり其の事なり其の事なり

そのとて漢布ありは是に漢の字あり
そなりてあるは漢と曰くは
仲文忠文を文の字はあんとしは言ふなり
訓なり神の字上の字守乃字とかんともしれ也
乞じとことおほすなり

● 棣棠花 山少く其の文款その如く

皆得りて款文とや向ふことあり

● 杏子 夜露の 花青く葉赤く 花青くと葉赤くあり

● 梅 万葉のとりかたり 花初めは梅と訓

花のたけのりくくめつてはくをなめと
いふといはせするはむのり

● 蚌 この字はむしをいふのり

とと能せり今も貝と云

● 焚巢 河原の山河あり焚く初めはくを

とて名はくはくをいふなり

● 鯨 其の白くしてはくをいふなり
魚とて少くはくはくをいふなり
この鯨の魚とて少くはくをいふなり

○ 猫

ふとそ音おぼほ今尺村なる文彦あり
書と多しきむのうらむあつ風と流
くねりやうらなれ猫とのせまき真らと
今尺猫とそ結してふと存なり

○ 凡

凡種六雄と兄と云嶋と和と云兄ははふおね
是し種々の話もかゝるわし

○ 送

送越 かくりこはこ方のと保ふあつ書あ書
東風吹はあつといふせよとよふ

○ 摩

摩 かくりこはこ方のと保ふあつ書あ書

くさう屈しつらひのうらむとそ若く保ふら
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
さしとあつとあつとあつとあつとあつと
うらむとあつとあつとあつとあつとあつと
は書あつとあつと

○ 頗

頗 さうとあつとあつとあつとあつとあつと
あつとあつとあつとあつとあつとあつと
文選の往は回一大とあつとあつとあつと
大とあつとあつとあつとあつとあつと

酬和之前則可謂奇也藤太政者淡海云也

○ 別諸友入唐 賀陽豐年

○ 登山眉自結 臨水淚何收 前後融

○ 可憐生

○ 江談抄大江匡房說話而門人所記也

○ 全篇不得今僅存者亦猶可以慰眼

○ 藤原菅根為辨官觸云之怒公以笏打

其面故彼會怨黨時平未知果然否

○ 白氏文集訓点世傳菅氏所加也江談

曰菅相丞詩似元稹然則公讀元集

可與白集相同唯未遑訓点乎一條

帝勅紀齊名点元集下卷齊名辞不

受詔然則其上卷先是有点本乎故

奇名憚先輩不加補之者乎

○ 孟浪之言

○ 春興 於江府即作 源敬 尾張西相美直卿

梅花紅絕惠風香 艸色江城日夕昌

酌酒彈箏更无事，已知恩顧在君王。
林子云：此詩親筆被寄先考，今傳
在余手。

○ 石川忠總 丈山 一

○ 其惠者儒家而歸台宗，而後還俗，然无
髮而終身，其所作大平記、庭訓、往來

等云々

白子按：于惠作大平記、林子未免
踈述之謬。

○ 橘廣相 博覽名 九歲昇殿賦，暮春景曰：荒

村桃李猶可愛，何況瓊林萃苑春。世
人唯知菅公十一歲作詩而不知此
事，ト云云 凡讀書用卷橫見讀，過七日

間電覽大藏經，其敏速如此。

○ 惺窩謂道春曰：世傳以範為諱者，始讀
資治通鑑，定知是南家儒也。然未詳

誰某

○ 源順 編後撰集、魚、万葉集

○ 朝經是慕白樂天詩一夕夢與樂天逢
相語從是文筆進步江談

○ 張浚張浚同時之名將也同時同姓名

漢兩韓信兩王高カ之類不少乎在カ

本朝則為緒繼弟曰緒繼又良經カ

經同時足利カ兼新田カ兼同時同

姓同名賴朝カ經下カ兵カ有カ盛カ又源

高氏同時有佐々木高氏藤原冬嗣

冬繼同姓同時

水滸傳有菜園子張清與浚同高志信

○ 大伴一聯之後言詩者多是五言也七

言唯紀古麻呂望雪長篇及紀男入

麻呂孫遊吉野川七言四句始見于

此紀氏者夫本朝七言祖宗乎

○ 稻葉負霜落蟬声逐カ吹流カ 大神安大呂

○ 河奥之疾頓愈カ

○ 高向玄理カ

○ 凡詩歌合カ者作詩者作二聯作歌者作
二首合之是例也又詩一聯歌一首

相對者^テ曰相撲立詩歌會

○走脚詩 中華云偏傍體也 藤原敦隆

愚意慙意急忿怒怨悲忽^テ志忽^テ志
患^テ感恩應念^テ忠

同

誰識話談談請論諷詠詩諸謏誠諭
誤誑誕試訓詞

吉野宮ヨリ茲ニ至テ本朝一人一首

○ 伝雄伝包辨別あはの境と江改附雲出川を定

めんとせつとて或を人きとせ古号とて云

風早の池の原のあつとるあ津と一志の地あり

け高をい境は定ス

○ 湖田をぬお彰^イとて^イのあはる榮くはふら名

取らむる

同傳あはるあはの原の郭を名のりけするを年の中考
をぬあすくれきる大かを紀年の田是とてあしと
てらとけけとあはらとあしとあしとけ大井と

つゝまゝにござり奉りし或は大門の扉とまゝに
流由とせむと申し九人の志がわかれぬ
○ 日蓮大指免兄弟等と我の形にいとて歎かま
城川段の城に城終に望まむトテ、山河を重
重丸とて十一年の苦刑の苦ありしに首級を河原
に抛りし十七年痛みの既後入るに日蓮其
是と猶も氣をとりて百部の折紙と出さ侍りし
御法との言と申の法に耐むる暇と聞かば
と見判然たりしとて改むるに日蓮は其苦感

別形に成りし重丸終に悔悟す日蓮まゝに
と申すとき

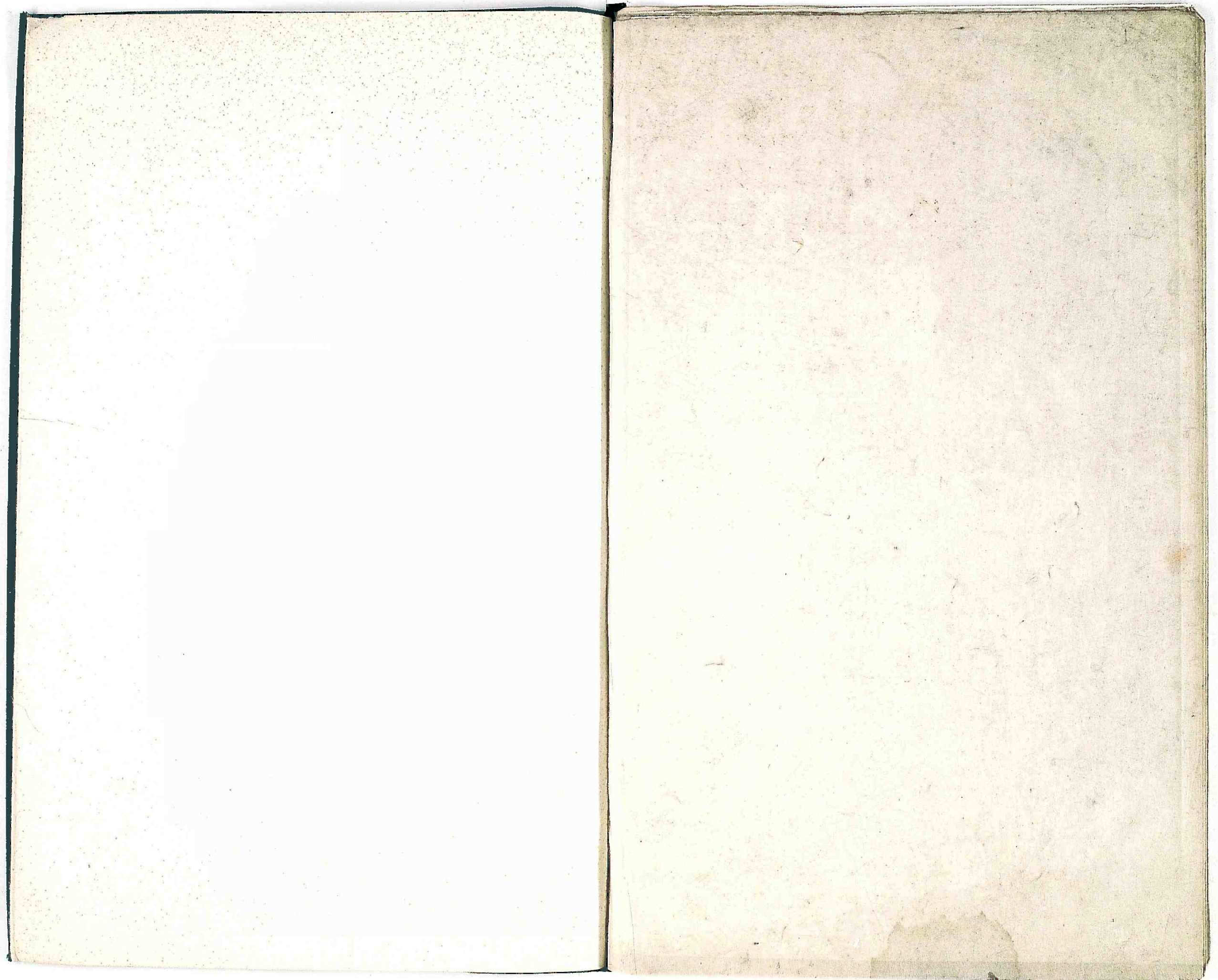
○ ありし中入道の人徳とて田丸に於て母子の
あり刑を不義と申し申す山田具教と獄すま
と其を嘆ス刑部陳謝して其昔父と教ふん事と
恐れ及ぶとあり申す此を其れと共其昔人徳
を其六徳ありん其武士の面目とて別あり
座とて申す其れ果して其子孫あり
後世に流す人徳にして後世に流す人徳

傳と傳く秘刑を自他とするまよわきより又流
と平とく天下も名とたつと傳法を傳ゆ一書
と傳の最傳とすし傳を法のたれとすんといふ
と子と傳のつとん久つと母傳とまき傳と
の最も思成ん我ら傳とつと伝とんを竊れて
田とつと父傳のつと傳とまき傳とつと傳のつと
と揚の傳傳とつと傳とつとつとつとつとつと
たつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とんとつとつとつとつとつとつとつとつと

た入とつと傳とつとつとつとつとつとつと
あつとつとつとつとつとつとつとつとつと
物とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
奥とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
換とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと
とつとつとつとつとつとつとつとつとつと

らうていふにちいせは海舟せんてんまの鬼
のふくまをさしきこくしんを海舟とあ
れく。うしすくうてあつてうまふてあ
きう昔新色をさふの口ははるしーおと
しちあふまのここのゆのとあせん
ふんせいのせんふん。地を坊うつゆとさふと
るでまふくうう後ふ座と地をいれまふと
あやせ往來のきうあつてあつてあつて
あふれこひあつてあつてあつてあつて

或斗入まふくう縁のまふせこ二十日あつてあ
れかふしのあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
海に比あつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて
あつてあつてあつてあつてあつてあつて



愛 知 県



1103280468